



私の居場所



佐藤大地

行かなきゃ。私が行くべき場所。私が居るべき場所。

私を存在させるべき場所。存在するべき場所。

懐かしい匂い。懐かしい音。懐かしい風景。

幾千繰り返された景色。終わらない日常。

雨の匂いがする。夜の匂いがする。

行かなくちゃ。行かなくちゃ。

蝉の音がする。夏の色。空の色。

庭で遊ぶバツタ達。どこかからする夕飯の匂い。

あの時代。あの場所。あの季節。

行かなくちゃ。私を誘う、太陽の色。

行かなくちゃ。微かに聞こえる風鈴の音。

行かなくちゃ。網戸越しの熱世界。

ソーダアイス。ポテトチップス。コーラ。

怒られないように秘密で食べる。

ソファの隙間、食べかすが散らばる。

差し込んだ手の心地よさ。

どこかからするピアノの音。

調子外れなエリーゼのために。

弛緩した空気。豆腐屋の音。

帰らなきゃ。私が帰るべき家。暖かい家。

帰らなきゃ。お風呂当番今日は誰。

帰らなきゃ。シュークリームがなくなっちゃう。買い置きしていた。食べられちゃう。

懐かしい色。誘われて、本当はどこに行くべきだろう。帰るべきなのだろう。

行かなきゃ。帰らなきゃ。こんな場所に居てはいけない。居るべき場所はここじゃない。

それは遠い場所だろうか。存外近い場所だろうか。

どうであれ、ここからは離れなければならない。離れなければ分からない。そう、ここがどこであるのかさえも。

もし、帰るべき場所が今、居る地点でもまずは離れなければならない。

例えば暗い部屋から明るいところへ出たときのように。そう、そのものを全力で感じなければ、それが何かは分からない。

だから、行かなくちゃ。帰らなくちゃ。

居るべき場所に。

非常な日常、それから抜け出して、あの頃の、そう、わずかな焦燥感と大きな安心感の中にあつたあの場所に。

本当の日常。常であるべき日常に。

行かなくちゃ。帰らなくちゃ。

夕刻、夕闇の中、陽の光に照らされた路面と空気。不思議な表情。

夜、雨の匂いに包まれる。止んだ雨の間から、夜の匂い。

薄明、薄目を開けて光を感じる。そしてまどろみの中、旅をする。

朝、芝生にまだ残る、光の粒、水の粒を見つける。木々の枝からも光が溢れる。

昼、照りつく日差しを窓越しに見ながら、蝉時雨の合間に聞こえるトラックの音。

一日の中であの一日に帰る。

行かなくちゃ。帰らなくちゃ。

私の居るべき場所。